

# 影に落ちる絆

## 第一章 静かな日常の亀裂

東京郊外の古いアパート、築30年の2DK。朝の陽光が薄汚れたカーテンの隙間から斜めに差し込み、キッチンのカウンターを淡く照らす。埃っぽい空気が漂う中、西川洋はトースターのタイマーを確認しながら、妻の綾が寝室から出てくるのを待っていた。トースターからパンの焼ける香ばしい匂いが立ち上り、部屋に広がる。綾は黒髪をショートに切り揃え、看護師の白い制服に袖を通す姿が、朝の柔らかな光の中で浮かび上がるように美しかった。制服の襟元から覗く鎖骨が、洋の視線を一瞬捉える。結婚五年目。子どもはいない。いや、正確には作れなかった。

洋はインポテンツに悩んでいた。医者には「心理的なストレスが主因」と診断され、バイアグラを試したが、綾を満足させられる日はほとんどなかった。綾はいつも「愛してるから大丈夫」と優しく微笑む。それが洋の心をさらに締め付けた。朝のルーチンはいつも同じ。綾の制服姿を見ながら、洋は胸の奥で小さな棘を感じる。綾の瞳に映る疲労の影が、自分の無力さを責めているように思えた。コーヒーの香りが部屋に広がる中、洋はカップを差し出す。指先がわずかに震える。

昨夜の記憶が、洋の頭をよぎった。綾が夜勤から帰宅した後、二人はベッドで抱き合った。綾の体は疲れていたはずなのに、優しく洋を迎え入れてくれた。綾の制服を脱がせ、白い肌が露わになる瞬間、洋の心は高鳴った。綾の丰满な胸を優しく撫で、唇を重ねる。綾の息が熱く、洋の体を刺激する。でも、挿入した瞬間、洋の体は早くも限界を迎えてしまった。数回のピストンで、情けなく果ててしまう。綾の膣内が温かく締め付ける感触が、洋を一気に頂点へ押し上げる。射精の余韻に浸る間もなく、洋は綾の顔を見た。綾の目には、わずかな失望が浮かんでいた。

「もっと……えっもう？」

綾は思わず口から漏らした言葉を、慌てて取り消そうとした。「ごめん、ひろくん。そんな意味じゃ……」

でも、その言葉は洋の心を深く傷つけた。不甲斐ない自分。男として、夫として、綾を満足させられない劣等感が、胸を締め付ける。綾の言葉は、無意識のものだった。綾はすぐに洋を抱きしめ、「愛してるよ」と囁いたが、洋の耳には「もつと」しか残らなかった。あの瞬間、洋は自分の性器が小さく、無力に感じた。綾の体は美しいのに、自分は彼女を満たせない。子どもができないのも、自分のせいだ。綾の優しさが、かえって洋を苦しめる。ベッドのシャツが少し湿り、綾の体温が残る中、洋は天井を見つめて眠れぬ夜を過ごした。

果てた自分が惨めで、洋はベッドの上で体を起こした。綾の体はまだ熱く、息が乱れている。洋は綾の目を見て、申し訳なさで胸がいっぱいになった。綾を満足させたい一心で、洋は指を伸ばした。綾の秘部に優しく触れ、ゆっくりと中指を挿入する。綾の膣内は温かく、濡れていた。洋の精液と綾の愛液が混じり、指が滑る。綾のクリトリスを親指で優しく刺激しながら、指を曲げてGスポットを擦る。綾の体がビクンと反応し、喘ぎ声が漏れる。

「あっ……ひろくん……」

綾の声は甘い、どこか切ない。洋は必死に指を動かした。綾をイカせようと、速度を上げる。綾の腰が少し浮き、息が速くなる。洋は綾の顔を見て、満足感を味わおうとした。でも、綾の目には涙が浮かんでいた。綾は突然、体を震わせて泣き出した。感情が爆発したように、声が溢れ出す。

「指じゃいや……ちゃんとしたペニスがいい……ごめんなさい……!」

綾の言葉は、洋の心を粉々に砕いた。綾はすぐに口を押さえ、涙をこぼしながら謝った。「ごめん、ひろくん……そんなつもりじゃなかったのに……」綾は洋を抱きしめ、背中を撫でたが、洋の体は凍りついていた。惨めさが胸を埋め尽くす。指じゃいや。ちゃんとしたペニスがいい。綾の本音が、洋の劣等感を最大限に刺激した。自分は綾に、ちゃんとした男として愛せない。綾の体が震え、涙が洋の肩を濡ら

す。綾は泣きながら洋を慰めようとしたが、部屋の空気は重く冷たくなった。二人はそのまま抱き合い、言葉を失った。綾の心理は混乱していた。(ごめんね、ひろくん……本当にごめん。でも、体が勝手に……もっと深いのが欲しくて……私、ひどい女)綾は洋の背中を撫でながら、自分を責めた。洋の優しさが、かえって綾の欲求を露わにする。

「今日も遅くなるかも。シフトが変わっちゃって……」

綾の声は少し疲れていた。制服の袖をまくりながら、綾はコーヒーを受け取る。指先が触れ合う瞬間、洋は綾の肌の温かさを感じ、胸がざわついた。綾の仕事は看護師。病院のシフトは不規則で、最近夜勤が増えていた。洋は会社員。普通のサラリーマンだが、一つ大きな欠点があった。自動車の免許を持っていない。学生時代に取得する機会を逃し、そのまま放置していた。綾は一度も文句を言わなかったが、洋は自分が夫として不十分だと感じていた。運転できないこと、それ自体は大した問題ではないはずだ。でも、インポの悩みが重なると、すべてが「男として失格」だと嘲笑されているように思えた。綾の帰宅が遅くなると、タクシーを呼ぶ彼女の姿を想像し、洋は胸が痛んだ。自分が運転できれば、送り迎えできるのに。綾の安全を思うと、罪悪感が募る。綾の制服のスカートが軽く揺れ、ストッキングに包まれた脚が視界に入る。洋は目を逸らした。昨夜の「もっと」が、頭の中で反響する。劣等感が、胃の底から湧き上がる。自分は綾に相応しくない男だ。子どもさえ作れない。綾がタクシーで帰宅する姿を想像し、洋は拳を握りしめた。

そんなある日、綾が帰宅して明るく言った。夕食の準備をしながら、綾の声は少し弾んでいた。綾の目は輝き、疲れが少し和らいでいるように見えた。

「同僚の山本さんが、車で送り迎えしてくれることになったの。助かるわ!」

山本。綾の病院の先輩看護師で、噂によるとバツイチで子どももいるらしい。洋は会ったことはなかったが、綾の話から頼りがいのある男だと想像した。翌日から、山本の黒いセダンがアパートの前に停まるようになった。洋は窓からそれを見送るのが日課になった。綾が車に乗り込み、山本がハンドルを握

る。車が去っていくのを眺めながら、洋は胸のざわつきを抑えきれなかった。綾の後ろ姿が、車窓から小さくなる。洋はカーテンを閉め、ため息をついた。部屋の空気が急に冷たく感じられた。綾が山本の車に乗る姿を想像し、洋の劣等感が再び募る。運転できない自分。綾を満足させられない自分。すべてが繋がりに、洋を苦しめる。

初めの頃は感謝していた。綾の安全が確保されるのだから。でも、ある日の送り時に、山本が家へ上がってきた。綾が忘れ物をしたのだ。山本は長身で、筋肉質の体躯。笑顔が爽やかで、洋に握手を求めた。手は大きく、握力は強かった。洋は少し圧倒された。山本の指が洋の手を包み込む感触が、妙に印象に残った。山本の体格は、洋の華奢な体と対照的だった。山本の腕の筋肉がシャツの下から浮き出ているのを見て、洋は自分の細い腕を意識した。

「西川さん、初めまして。山本です。綾さんをよろしくお願いしますよ」

その時、綾が軽く言った言葉が、洋の心に深く刺さった。綾は山本に向かって微笑みながら、さりと。

「ひろくんは運転できないから、助かるわ。本当にありがとう、山本さん」

洋は顔を引きつらせながら微笑んだが、内心では傷ついていた。まるで自分が不甲斐ない夫だと、面と向かって言われたようだった。運転できないこと、それ自体は大した問題ではないはずだ。でも、インポの悩みが重なると、すべてが「男として不十分」だと嘲笑されているように感じた。山本はそれを見抜いたような目で、洋に微笑んだ。目は優しく探るような鋭さがあった。洋は握手を返しながら、胸のざわつきを抑えきれなかった。山本の視線が、洋の弱さを暴くように感じた。山本が去った後、洋はリビングのソファに座り込み、両手で顔を覆った。綾の言葉が頭の中で繰り返される。「運転できないから……」。昨夜の「指じゃいや」が重なり、劣等感が爆発する。綾の優しさが、かえって洋を追いつめる。綾はそんな洋の変化に気づかず、夕食の準備を続ける。部屋に炒め物の匂いが広がるが、洋の胸は苦い味でいっぱいだった。

綾の心理はその頃、複雑だった。家で洋と過ごす時間は穏やかで、愛情を感じていた。でも、仕事のス

トレスと、夫婦生活の物足りなさが、心の隙間を広げていた。（ひろくんは優しい。でも、もつと……体が求めているのに、言えない。子どもも欲しいのに……）綾は鏡の前で自分の顔を見つめ、ため息をついた。看護師の仕事はハードで、患者さんの苦しみを間近で見る。家に帰って、洋の優しさに癒されるはずなのに、最近はそのだけでは足りない気がした。夜のベッドで洋の体温を感じながら、綾は体が疼くのを感じていた。優しい愛撫は心地いいが、満足に至らない。綾は洋を傷つけたくなくて、黙っていた。昨夜の「指じゃいや、ちゃんとしたペニスがいい」は、無意識に漏れた本音だった。綾はすぐに後悔した。洋の顔が曇るのを見て、胸が痛んだ。（ごめんね、ひろくん。そんなつもりじゃなかったのに……私、ひどい）綾は洋を抱きしめ、優しく髪を撫でたが、自分の欲求を抑えきれない自分に苛立った。山本の送り迎えが始まって数日後、綾は車内で少しづつ心を開くようになった。山本は話上手で、仕事の愚痴を聞いてくれる。綾はそれが心地よかった。車内のシートは柔らかく、エンジンの低いうなりがBGMのように響く。雨の日は特に、車窓を叩く雨音が心を落ち着かせる。

綾は山本の横顔を見ながら、昨夜の洋とのシーンを思い浮かべた。洋が早く果ててしまった瞬間、綾の体はまだ熱く、満足していなかった。思わず漏らした言葉が、洋を傷つけたことを後悔する。でも、体は正直だ。もつと深い快楽を求めてしまう。山本の存在が、綾の心に小さな影を落とす。綾は窓の外を見つめ、ため息をついた。洋の優しさを愛しているのに、体が別のものを求めている。神様は残酷だわ、と綾は心の中で呟いた。

山本の送り迎えが始まってから、洋の朝は変わった。

毎朝、アパートの前に黒いセダンが停まる音が聞こえると、洋はカーテンの隙間から外を覗くのが習慣になった。綾が玄関を出て、足早に車に向かう。山本が助手席のドアを開け、綾が滑り込む瞬間、洋の胸に小さな棘が刺さる。ドアが閉まる音が、まるで綾を閉じ込める音のように響く。車がゆっくり発進し、角を曲がって見えなくなると、洋はカーテンを閉めて息を吐く。

最初はただの感謝だった。綾の安全が確保される。夜勤の帰り道、タクシーより安心だ。でも、回数を

重ねるごとに、洋の視線は変わっていった。車という密閉された空間に、綾が山本と二人きりでいるという事実が、じわじわと洋を蝕むようになった。

（僕の綾が……あの男の車に乗せられてる）

助手席に座る綾のシルエットが、窓越しに小さく見える。綾は最初、緊張した様子だったが、数日後には自然に笑顔で山本に話しかけるようになった。山本が何か言って、綾がぐすくす笑う姿を、洋は一度見た。綾の肩が軽く揺れ、髪が揺れる。あの笑顔は、本来は自分のものだっただけだ。家で綾が笑うときも、最近では疲れた色が混じるのに、外では違う。山本の車の中でだけ、綾は自由に笑っているように見えた。

嫉妬は、最初は小さな苛立ちだった。

「綾が楽しそうでよかった」と思おうとした。でも、車が去った後、部屋に戻ると、胸の奥に黒い塊が残る。綾の匂いが、まだ部屋に残っているのに、綾は今、山本の車の中にいる。車内の密閉された空気の中で、綾の香水の甘い匂いが、山本の鼻腔に届いている。綾の吐息が、山本の耳に届いている。綾の体温が、助手席のシートに染み込んでいる。

（僕の綾が……あの男に連れ去られている）

車という狭い空間は、洋にとって牢獄のように感じられた。外から見えない。音も聞こえない。綾がどんな顔をしているか、どんな話をしているか、何もわからない。ただ想像するしかない。山本の大きな手が、ハンドルを握る。綾の細い手が、膝の上に置かれている。山本が信号で止まったとき、綾に顔を近づけて何か囁くかもしれない。綾が頬を赤らめて、微笑むかもしれない。

（僕とは違う……ちゃんとしたオスに）

山本は長身で、肩幅が広く、声が低く落ち着いている。握手したときの力強さ、腕の筋肉の張り、すべてが洋とは違う。洋は自分の細い腕を見下ろし、ため息をついた。綾を抱くとき、洋はいつもすぐに果ててしまう。綾を満足させられない。指で慰めようとしても、綾は泣きながら「ちゃんとしたペニスが

いい」と本音を漏らした。あの言葉が、洋の頭の中で繰り返される。

（僕の綾が、あの男に……）

嫉妬は、夜になると強くなった。綾が夜勤で帰宅しない日、洋はベッドで一人、目を閉じる。綾は今、山本の車の中で帰宅中だ。助手席に座り、山本の横顔を見ながら、笑っているかもしれない。山本の匂いが、綾の髪に染みついているかもしれない。綾の制服に、山本の香水が移っているかもしれない。ある朝、綾が帰宅したとき、綾の髪から微かに男のコロンの匂いがした。山本のものだ。洋は綾を抱きしめながら、胸が締め付けられた。綾は疲れた笑顔で「ただいま」と言い、洋の胸に顔を埋めた。でも、洋は気づいていた。綾の体が、少しでも違う匂いに染まっていることを。

（僕の綾が……山本に支配されている）

嫉妬は、洋を蝕み始めた。綾が山本の車に乗る瞬間を見るたび、胃が痛む。綾の笑顔が、山本に向けられるたび、心が裂ける。綾の匂いが、山本の車内に残るたび、劣等感が爆発する。

（僕とは違う、ちゃんとしたオスに、綾が奪われていく）

洋はカーテンの隙間から、今日も車を見送った。綾が助手席に座り、山本がアクセルを踏む。車が角を曲がり、見えなくなった瞬間、洋は膝から崩れ落ちた。胸を押さえ、息を荒げながら、呟いた。

「……綾……僕の綾なのに……」

部屋は静かだった。綾の残り香だけが、残酷に漂っていた。

（この嫉妬は、まだ始まったばかりだ）